

2-1 高橋源吉と山寺

大場詩野子 小林俊介

1. はじめに

山形県内には、高橋源吉という明治時代の画家の油彩画が企業や個人宅などに残されており、11点の作品について所在がわかっている。画題は山形県内の風景が中心で、山寺の天華岩や寒河江市の臥龍橋などの名所を描いたものが多い。高橋源吉（1858－1913）とは、実は重要文化財の《鮭》や《花魁》を描いた高橋由一の息子であり画家である。父の由一や外国人画家フォンタネージから当時最先端の油彩画教育を受けた源吉は、明治前期の中央画壇で画家として、また論客としても活躍をした人物であった。しかしその晩年は東京を離れ消息を絶ち、妻のたかとともに放浪生活を送り、最後は石巻で客死している。その足取りについて詳細は不明だが、途中山形を少なくとも2回訪れており、県内に存在する作品群はその来形時に描かれたものである。

そもそも父の由一については、日本における近代洋画への道を切り開いたあらゆる功績とその独特の油彩画技術が現在では高く評価され、これまで様々な角度から多くの研究が行なわれてきた。また、東北地方での新道の記録画制作や、富豪達の肖像画制作などの活動により、山形県と深くかかわりがあることもよく知られている。一方で息子の源吉は、近年、由一との共同制作や天絵学舎の共同経営などの観点から、東京での活動や作品に光が当て始められてはいるが、本格的な研究はまだ始まったばかりである。

そこで本研究では、県内に残された11点の作品についてその画題や、来歴、制作背景などを明らかにすることで、源吉の晩年における山形での活動を探ることにした。また、これらの油彩画に使用された制作材料と技法を明らかにすることで、源吉の油彩画の特徴をとらえることにした。源吉は山寺において、いかなる人物とかかわりを持ち、どのように絵を描いたのか。源吉の作品は本プロジェクトの対象地域外に存在するが、その作品のうち《臥龍橋》は六十里越街道の要衝である白岩の臥龍橋を描いたもので、西村山地区との関連も深い題材である。これらの作品は、このこれまで注目されることの少なかった高橋源吉という画家自身の存在はもとより、明治期の洋画表現の一端と地域におけるその受容を具体的に伝えるものとして貴重であり、まさに山形県の重要な地域文化遺産であると考えている。このうち本稿では、源吉が2回目の来形の折に行なった山寺での展覧会とその出品作を中心に考察したい。

2. 作品概要

まずは、山形県内に存在する高橋源吉の作品を以下の表1に示す。このうち、⑩《本合海》はこのたびの調査において新たに発見されたものである。以下に述べる絵画寸法や制作材料および技法の特徴が他の作品と共通していることから、源吉の作品であると判断した。

所蔵者は個人や企業が多く、現在山形市が所蔵する③《宮城縣穴瀑之紅葉》、④《天華岩》、⑦《藤花滝》についても、以前は山形市山寺在住の伊澤家とその親族が所有していた。また、これらの作品のうち、1911年（明治44）に山寺の立石寺根本中堂で行なわれた展覧会（以下、山寺展と称す）の出品作である可能性の高い作品は、当時の新聞記事に掲載された作品名や来歴から、③、④、⑤、⑥、⑩であると考えられる。来歴の詳細は後述する。

表1 山形県内に存在する高橋源吉の作品

作品番号	作品名	署名	寸法(タテ×ヨコcm)	所蔵者	旧修復
①	臥龍橋	G.TAKAHASHI 1902	60.8×152.2	山形銀行	有
②	楠木正行如意輪堂に和歌を残すの図	G.TAKAHASHI 1902	58.0×91.5	個人蔵	有
③	宮城縣穴瀑之紅葉	G.TAKAHASHI	31.5×49.5	山寺芭蕉記念館	無
④	天華岩	なし	69.9×151.6	山寺芭蕉記念館	無
⑤	山寺全景	G.TAKAHASHI	68.0×149.5	将棋むら天童タワー	有
⑥	立谷川 対面石	なし	68.0×149.6	将棋むら天童タワー	有
⑦	藤花滝	なし	90.8×72.7	山寺芭蕉記念館	無
⑧	とら	G.TAKAHASHI	45.0×70.0	天童市立荒谷小学校	無
⑨	大石田風景(仮題)	G.TAKAHASHI	38.9×67.0	個人蔵	無
⑩	本合海	なし	70.1×151.5	個人蔵	無
⑪	腹巻岩	G.TAKAHASHI	41.5×72.5	個人蔵	無

宣城縣六瀑之紅葉
明治四十四年十二月
高橋源吉

A technical drawing of a door frame cross-section. It shows a vertical frame member with a horizontal hinge pin and a lock mechanism. The lock mechanism consists of a cylindrical body with a handle and a locking bolt. The drawing is a line drawing with no shading.

A close-up photograph of a wooden door frame. A small wooden wedge is visible, wedged between the door and the frame. A nail is also visible, driven into the wood. The wood shows signs of wear and staining.

端を凸型に加工した左右杵が凹型に加工された上下杵に差し込まれている。また、楔は小さな三角形の形をしており、木杵内側を斜めに切断されて作られた楔穴か、上下杵にあけられたホゾ穴に差し込まれている(図3、4)。以上のような木杵と楔、楔穴の構造は、源吉の作品に特徴的なものであり、作者を同定する物質的な要件や、作品の制作年代を特定するための検討材料としてとらえることができる。

以上のように高橋源吉の作品では、作画手順は旧派の技法を踏襲している一方で、油絵具の透明性は利用

していないことが特徴である。絵具の盛り上げやグレージング技法を用い、徹底的な質感描写へのこだわりを見せる由一作品に対して、源吉の作品の特徴はむしろ、画面全体の構図や形態、色彩のバランスに留意しながら、様々なモチーフを要領よく描き分けていく点にある。

また、保存の観点からいえば、以上のような手順で描かれた絵具面は、制作後、環境の変化しやすい一般家屋などで100年余り保管されていたにも関わらず、絵具のつきがよく、重大な傷みを伴っているものは少ない。この理由として、油絵具に十分な乾性油が混ざれていることが挙げられ、源吉が、油絵具の性質を理解し確実に使いこなしていることが伺える。

各作品の画題、来歴、保存状態については、以下に詳述する。なお山寺地区の地名については以下の地図(図6)を参照されたい。



図5 《宮城縣穴瀑之紅葉》部分写真

(1) 臥龍橋

画題：臥龍橋は、湯殿山参詣の道である六十里越街道沿いにあり、寒河江川を隔てて白岩地区と高松地区を結んでいる。江戸時代から明治にかけて、幕領である白岩からの米納や、湯殿山および三山参詣者による交通が盛んに行われた場所である。

臥龍橋の歴史は、江戸初期に白岩領主である酒井長門守が現在の場所より200mほど上流の緒熊淵に架橋したことに始まる。その後、流出と架橋を繰り返し、1827年(文政10)に現在地に橋が架けられた。当初は江戸時代の土木技術の集大成とされる、橋脚を組まない木製の刳(はね)橋式で架橋された。1858年(安政5)に架け替えられた刳橋式の臥龍橋が菊地新学によって1880年(明治13)頃に撮影され(図8)、1881年の明治天皇東北御巡幸の際、展覧に供されている。1889年(明治22)に木製の木棋(もくきょう)式となり、さらに1937年(昭和12)にコンクリート製のアーチ式となって現在に至っている(図9)。作品に描かれているのは、1889年に架橋された木棋式のものである。



図6 山寺地区と地名

臥龍橋という名称は、1828年（文政11）、白岩村の医師で学者の高橋礼輔が名づけたとされているが、それ以前や以後にも龍脊橋、陣峯橋、白岩橋などと、その姿や架橋場所などにちなんで様々な呼び方がされた。臥龍橋の名が定着したのは、1889年（明治22）、刎橋式から近代的なアーチ式の木拱式に架け替えされた際だと考えられている^{註4}。

作品の構図は中央の橋とその下を流れる寒河江川を挟んで、画面右手に南岸の左澤地区が、左手に北岸の白岩地区へと続く岩壁の切り通しが描かれる。写生をもとに作品制作を行ったとは考えにくく、他の作品と同様、写真を参照したと考えられる。川の流れは実際とは逆向きに描かれていることも、忠実な写生でないことを裏付ける。ただし、同構図の写真は現在発見されていない。左手に切り通しのある構図は、『山形県名勝誌』（山形県庁、1908年）の掲載写真《臥龍橋》（図10）や、1913年（大正2）寒河江会場での山形県農産品評会記念アルバム掲載の臥龍橋の写真（図11）に近いものの、樹木や河岸の砂利の形状が異なっている。

来歴：現在、山形銀行天童支店（旧天童銀行）が1961年（昭和36）に改修された折に発見されたが、旧天童銀行に昭和はじめまで掛けられていたという^{註5}。天童銀行創立は1901年（明治34）であり、創立記念などで収蔵された可能性もある。山形市で源吉を世話したとされる奥平直則（1923年没）は山形銀行の前身である両羽銀行の行員であり、同作品収蔵に関して何らかの関係があったと推定される^{註6}。

保存状態：ワックスによる裏打ちが行なわれている。また、作品裏面には湿気などの防止を図ったと思われる防湿用のパネルが取り付けられている。額はその修復時にアクリル製のグレージングがついた箱額に新調されている。



図7 《臥龍橋》

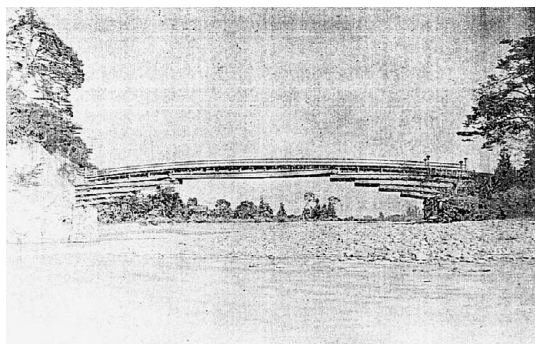


図8 臥龍橋（菊池新学撮影）



図9 現在の臥龍橋（2012年撮影）

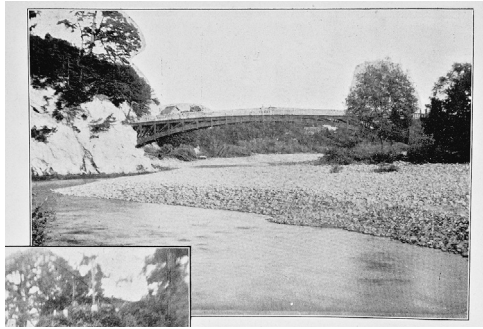


図10 山形県名勝誌に掲載された臥龍橋の写真



図11 山形県農産品評会記念アルバム掲載の臥龍橋の写真

(2) 楠正行如意輪堂に和歌を残すの図

画題：楠木正行（不明－1348）は南朝の武将楠木正成の長男で、小楠公とも言われる。父の正成とともに反幕府勢力として活躍し、天皇に忠義を尽くしたことから、明治時代から第二次世界大戦終了時まで、国策によって日本第一の忠臣とされた。本作品に描かれた情景は、『太平記』巻26にある以下の逸話を題材にしている。北朝の高師直との一戦の前に死を覚悟した正行は、先帝の後醍醐天皇陵に参拝し、奈良吉野の如意輪寺本堂の扉に辞世の句を矢尻で刻んだ。

明治20年代前半くらいまでの歴史画には、天皇に忠誠を尽くした歴代の忠臣が好んで取り上げられており、本作品と画題を同じくするものに、高橋由一が宮内省からの下命で制作、献上した油彩画《楠正行如意輪堂に歌を題するの図》^{註7}（図13）および、その下図と考えられている水彩画《如意輪堂に於ける小楠公図》^{註8}（図14）がある。両者を比較すると本堂扉の角度、後方に描かれた大木の形や枝ぶりなど細部の構成が異なっているが、本作品は後者に近く、下図の構図を踏襲した可能性がある。

来歴：山形市小立の松原さん所蔵であったが、同女の義姉（夫の姉トク）の嫁ぎ先であった柴田清作は、奥平家が山形市七日町の大通り沿い、当時の山形市横南町（現在の山形市本町一丁目と十日町一丁目の境目）に経営する靴店の使用人であり、作品は奥平家から譲り受けたものであるという。奥平は源吉来形時に住居に困っていた源吉夫婦に住居を世話したといい、作品はその際のお礼として譲り受けたという^{註9}。



図12 《楠正行如意輪堂に和歌を残すの図》

保存状態：2001年（平成13）に修復が行なわれ、ワックスによる裏打ちと木枠の交換が行なわれている。また、額にはグレージングが取り付けられている。裏蓋はなく、作品裏面に《臥龍橋》と同様に防湿用パネルが取り付けられている。



図13 高橋由一作《楠正行如意輪堂に歌を題するの図》



図14 高橋由一作《如意輪堂に於ける小楠公図》

(3) 宮城縣穴瀑之紅葉

画題：現在では姉妹滝と呼ばれているが、かつては穴瀑、夫婦瀑布とも呼ばれていた。山寺より二口峠を経て仙台市にいたる街道の途中にあり、同街道沿いにある磐司岩、秋保大滝などを含めた名取川上流一帯が現在では二口峡谷とされている。現在は宮城県に属しているが、秋保大滝は慈覚大師が大滝不動堂を建てた霊場であり、この地域は当時、かつての山寺の寺領であった意識から「奥山寺」として山寺の名所として認識されていた。

本作品は1910年(明治43)に保硯会から発行された『山寺名勝案内』に掲載された夫婦瀑布(図16)と同構図であり、源吉はこの写真を参考に制作を行なったと考えられる。ただし、名勝案内に記載された写真は約4×6cmと小さく細部が不明瞭であることから、実際には同構図の写真プリントや絵葉書を用いた可能性もある。

来歴：2010年(平成22)より山寺芭蕉記念館の所蔵だが、それ以前は山寺の伊澤家の分家である伊澤友明氏の所有であり、同氏の祖父で明治44年当時、山寺展を企画した山寺村村長の伊澤不忍の弟の伊澤要三郎氏が購入したと伝えられている。要三郎氏は当時山寺村役場の助役を務めていたという^{註10}。制作年について、作品裏面にあてられたベニヤ板には「宮城縣穴瀑之紅葉 明治44年11月 高橋源吉」(図1)とあることから、この作品は1911年(明治44)10月20日から11月5日まで開催された山寺展の会期中か、終了後に制作された可能性がある。もしくは購入時期を示しているかもしれない。ただし、以上は、ベニヤ板が新しく、記載された文字が源吉以外の手によるものであるため、さらなる検討が必要である。

保存状態：後世の処置で木枠から外され、裏面にベニヤ板があてられている。支持体とベニヤ板は一部接着されている。支持体は波打ち状の変形が生じており、変形箇所、絵具層の亀裂や剥離、欠損がわずかに見られる。それ以外の部分では絵具の固着状態はよいが、支持体が木枠に張られておらず不安定な状態であることから、今後、展示や取扱いの際に上記の痛みが進行する可能性がある。早急な処置が必要である。



図15 《宮城縣穴瀑之紅葉》

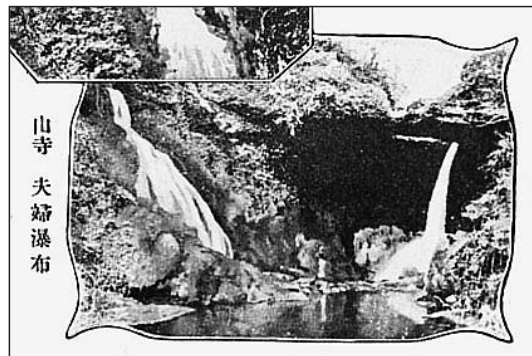


図16 山寺名勝案内に掲載された夫婦瀑布

(4) 天華岩

画題：天華岩(てんぐいわ)は、立石寺宝珠山山腹の西端斜面に直立する岩体である。長楕円形の風化穴のある凝灰岩独特の形状をしており、この天華岩をはじめとする奇岩怪岩は立石寺への信仰と結びついて宝珠山の聖域を作り出した。

天華岩の名称については、『山寺名勝志』(1908年出版)では天狗岩と表記されるが、1925年(大正14)に再版された同書では、天花岩と表記され「俗に天狗巖ともいふ」とある。

構図は、前景に宝珠山の西側から見た天華岩を配し、後方中景に二口峠に通じる馬形地区が描かれている。この地点からの天華岩の姿は、現在、多くの観光客が目にする山寺駅の南側から宝珠山を正面に見据えた場合の形状とは異なり、より量塊性のあるものとなっている。このような構図選択には、当時、山寺展の手引きをした伊澤栄次(不忍)氏の強い意向が反映されており、伊澤をはじめとする有力者によって山寺の保存と振興を目的に組織された保硯会(ほりゅうかい)の写真(図18)がもとに制作された可能性が高い。二口峠は宮城県の秋保を経て仙台へといたる街道で、古来より荷物の運搬や、江戸時代からは出羽三山や山寺、松島への参詣に使用された。しかし、1882年(明治15)の関山新道開通後は、ほとんど使われなくなった。

来歴：山寺展出品作と考えられ、現在は山寺芭蕉記念館所蔵であるが、2002年（平成14）まで山形市山寺伊澤家の所蔵であった。「山寺での展覧会の出品作で、売れ残っていたものを（伊澤栄次が）引き取った」との口伝が残る。

保存状態：額は当初のものと思われる。作品は、画面全体に褐色の物質が付着しており、本来の色調が失われている。木枠と支持体裏面には水性の染みが多く見られ、木枠にはススが付着し黒変している。また、支持体に破れや変形があり、破れの箇所は裏面から紙があてられ、表面から塗料が塗られている。

旧所蔵者である伊澤家は、かつては茅葺き民家で現在までに何度か改装や増築を経ており、昭和40年代までは屋内に囲炉裏があった。画面の変色や水染み、ススの付着は、囲炉裏の煙や雨の影響を受けたためと考えられる。しかしそのような環境下で長期間保管されていたにもかかわらず、絵具の固着状態がよい。



図17 《天華岩》



図18 山寺名勝案内（1910年）に掲載された天華岩

(5) 山寺全景

画題：山寺立谷川河畔の田楽淵（でんがくぶち）^{註11}付近から根本中堂方面を眺めた景色を描いている。

構図は、保硯会出版物に記載された写真の中では、『山寺名勝案内』（図20）に掲載されたものが一番近く、白く塗られた高橋の欄干^{註12}が克明に描写されている。立石寺への参詣道である高橋は何度も架橋が繰り返されているが、そのはじめは田楽淵に架けられたという^{註13}。また、高橋がかかる以前は、南院と中島間で立石川を渡し、次に山王院と千手院間で楓川を渡るといふ、いわゆる寺街道が参詣に用いられていた^{註14}。したがって慈覚大師が山寺へ入場した当時は、高橋は存在しなかったことになるが、かつて高橋のかかっていた田楽淵から白く光る新しい高橋を眺めるこの視点には、俗世から神仏の住む宝珠山への架け橋という認識と、慈覚大師の山寺入場のイメージとを重ね合わせているように思われる。

来歴：株式会社天童タワーの初代社長である山口清氏が、1955年（昭和30）頃、洋画家の堀尾芳克氏（1907－1960）より《立谷川 対面石》とともに購入したといわれている。堀尾は福岡県生まれで、雅号を亀岩とし、奥山寺に山小屋をアトリエとして制作に勤しんだ。人柄よく、山寺の住民に受け入れられ、現在、宝珠橋のたもとで経営されている「お休処 対面石」には、酒代や食事代として置いていったという油彩画が残されている。1960年（昭和35）12月14日に吹雪の中遭難して他界した。享年53歳。山寺に居住していたことから、本作品や《立谷川 対面石》と関わりを持ったと考えられるが、その詳細については不明であり今後

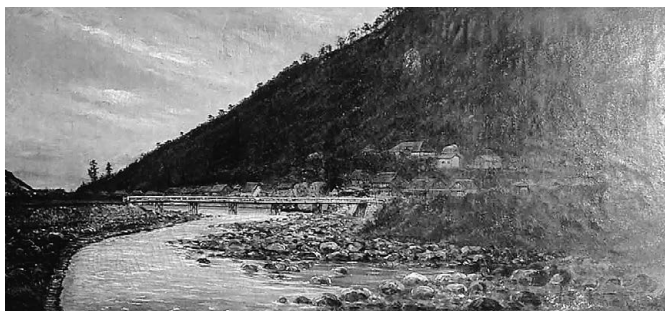


図19 《山寺全景》



図20 山寺名勝案内（1910年）に掲載された写真

の課題である。

保存状態：表具師による修復が行なわれている。地塗りのあるキャンバスで裏打ちされ、木製パネルに張り込まれている。額は新調されている。

(6) 立谷川 対面石

画題：慈覚大師が寺院建立の了解を得るため、この地域を住处とする狩人の磐司磐三郎と会談したという伝説の残る対面石と、そこから立谷川を挟んで対岸の芦沢峠方面を眺めた景色を描いており、慈覚大師が三宝岡の風立寺から芦沢峠を通して山寺へ入ったという伝説を想起させる構図となっている。対面石の傍らに描かれた榎（えのき）の木は「山寺七木」の一つであり、洪水で流失したとされ、現存しない^{注15}。後景には明治から昭和にかけて石材採掘の好景気に沸いた山寺の採石場であった「たて山」が描かれる。

本作品も、『山寺名勝案内』に掲載されている写真（図22）と同様のものを参照した可能性が高い。しかし、前景の対面石と後景のたて山の間隔は写真よりも広く、横長の作品寸法に合わせて構図を操作したことが伺える。

来歴：《山寺全景》と同様に、株式会社天童タワーの初代社長である山口清氏が、1955年（昭和30）頃、堀尾芳克氏より購入したといわれている。

保存状態：《山寺全景》と同様の状態である。表具師による修復が行なわれている。地塗りのあるキャンバスで裏打ちされ、木製パネルに張り込まれている。額は新調されている。画面全面に鱗状の細かい亀裂と剥離と欠損が発生しており、支持体の欠損や補彩も見受けられる。とくに空の部分は欠損箇所が多く、広範囲に補彩されている。



図21 《立谷川 対面石》



図22 山寺名勝案内
(1910年)に掲載された写真

(7) 藤花滝

画題：『山寺名勝志』によれば、藤花滝は、面白山四十八瀑の一つ。面白山は山形市と仙台市の県境にある奥羽山脈中の火山で、仙台側から見ると面が白く見えることから、面白山と名付けられた。立石寺から東へ12kmほどのところにあり、山寺を流れる楓川の流源であり、山寺三大奇景の一つとされる。また、慈覚大師が山寺を開くにあたり、まずこの面白山から着手したとされている^{注16}。

構図は、対象作品のなかで唯一の縦構図で、右斜め方向から見た藤花滝が描かれているが、保硯会が出版した書物に掲載されている藤花滝の写真は、滝を正面から捉えているものしかない（図24）。また、本作品は別の絵を塗りつぶして制作されており、X線透過画像からは、文机で書物を読んでいる着物姿の男性が横構図で描かれていることがわかる（図25）。この絵を覆い隠すように厚く塗られたナイフ痕や筆痕を残した荒い筆致は、本作品のみにみられる特徴である。

来歴：天華岩と同様に、2002年（平成14）まで、山形市山寺伊澤家の所蔵であり、山寺展の売れ残りとして伝えられている。

山寺展を報じた新聞記事^{注17}には、「高橋氏が作品たる天狗岩、山寺風景、面白山瀑布、最上川等は何れも運筆の自由と配色、光線の宜しきを得真に迫りたる佳作なり」とあり、ここに記された「面白山瀑布」が本

作品を指している可能性がある。しかし、先述のように、唯一の縦構図の作品であること、保硯会が出版した書物にある藤花滝の写真には同構図のものがないこと、別の絵を塗りつぶして制作されていることなどから、他作品との相違点が多いため、詳細な検討が必要である。

保存状態：画面全体に経年による亀裂が発生しており、剥離している部分もわずかにある。画布の張りが弛んでバタついているため、取扱いの際に亀裂や剥離が進行する可能性がある。また、天華岩と同様に、画面全体に褐色の物質が付着しており、本来の絵具の色彩が判断できない状態になっている。



図23 《藤花滝》



図24 山寺名勝案内（1910年）に掲載された写真

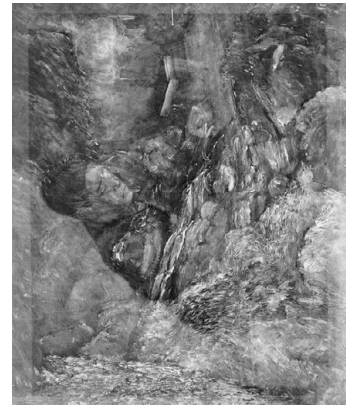


図25 藤花滝のX線透過画像

(8) とら

画題：灰色の空を背景に画面中央に虎が描かれている。この作品の参考となった資料はまだ発見されておらず、今後の課題としたい。

来歴：本作品が所蔵されている天童市荒谷小学校は、かつて山寺小学校の分校であり、《とら》は源吉が山寺で学校の教材用にと依頼され描いた、3枚の動物の絵のうちの1枚だという^{註18}。ほかに象の絵が山寺小学校にあったが、事情を知らない人が画面を塗りつぶしてほかの絵を描いてしまったと伝えられており、現在は所在が不明である。

保存状態：木枠から外され、裏面にはベニヤ板が当てられている（図27）。支持体に波打ち状の変形と小さな破れがある。他にも絵具の亀裂、剥離、欠損が発生している。



図26 《とら》



図27 裏面にはベニヤ板が当てられている

(9) 大石田風景（仮題）

画題：所有者である戸田家では、大石田の風景が描かれていると伝えられているが^{註19}、詳細は不明。

来歴：現在写真館を営んでいる戸田家では、銀行からもらったと伝えられている。1931年（昭和6）に死去した戸田家の2代目は大石田銀行^{註20}の支配人であり、3代目は源吉が山形に滞在した明治末に20歳で自転車

店を開業、15年後には写真館を始めたという^{注21}。

保存状態：額は当初のものと考えられる。作品は、画面全体が汚れて覆われているため、褐色調の色調を呈しているが、額に覆われた部分では明るい灰色調の色彩が確認される。汚れ以外の痛みはなく、絵具の固着もよく保存状態は良好である。



図28 《大石田風景 (仮題)》

(10) 本合海

画題：本作品は、このたびの調査において、新たに発見された。

本合海は、最上川の中流域に位置し、酒田から大石田へ上るルートの途中にある。北流してきた最上川が八向山に当たって西向きに大きく迂回するこの地点は、舟運の中継地として、また陸奥国へ抜ける陸上交通の要地として栄えた場所である。源頼朝に追われた義経が平泉に逃れる途中、清川より舟で最上川を遡り上陸した地と伝えられ、松尾芭蕉が奥の細道で庄内まで舟で下った際の乗船地としても知られる。

この地を起点として1878年（明治11）に岩根新道、1878年および1880年（明治13）には本合海新道が開鑿され、これら新道の記録画が1884年（明治17）に高橋由一によって制作されている（図30）。本作品は由一が写生した地点（図31）より北側の、現在、義経上陸の碑が建立されているあたりからの眺めを描いたものと思われる（図32）。画面左手に白く描かれた山が日山であるというのもこの視点を裏付ける。

来歴：現在、山寺ホテルに展示されていること、寸法、額や木枠の構造、支持体と地塗りの特徴が、《天華岩》と同様であることから、《天華岩》と同時期の1911年（明治44）に山寺展出品のために制作されたとみてよい。

保存状態：額は当初のものと思われる。画布の上辺が木枠から外れており、下方向にたるみが生じている。破れも見られ、補修の痕がある。画面全体に縦方向の亀裂が発生しており、画面下部には亀裂に伴った剥離と欠損が集中している。裏面には、埃が大量に付着している。全体として痛みがひどく、早急な手当てが必要である。

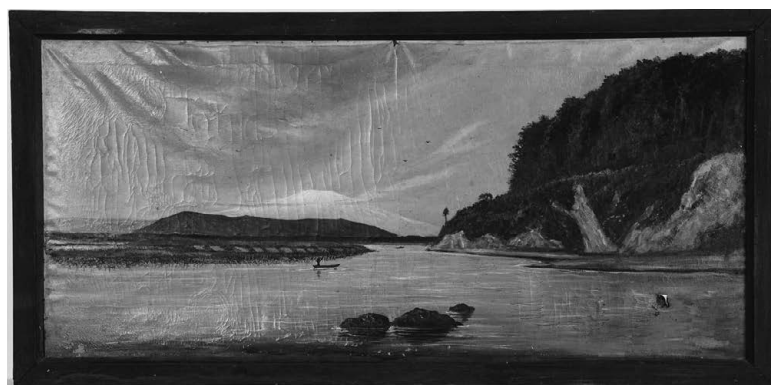


図29 《本合海》



図30 高橋由一作
最上郡元合海村ト蔵岡村ノ間
最上川渡船場ノ図



図31 由一の写生地点
(2013年撮影)



図32 源吉の写生地点
(2013年撮影)

(11) 腹巻岩

画題：このたびの調査において、最上峡の風景、庄内町清川地内から腹巻岩方向を見た風景であることが判明した。腹巻岩は、最上川と立谷沢川の合流地点にある巨巖である。画面右手に描かれた崖が腹巻岩であり、源頼朝に追われた義経の伝説が残る場所でもある。それによれば、岩の横縞の腹巻のような模様から、義経とともに最上川を渡った弁慶が腹巻を乾かした場所とも、腹巻が風で飛ばされて張り付いたとも言われる。

最上川を酒田から本合海へ上るルートの中にあるこの場所は、古くから舟運の難所であった。享保年間には舟事故防止のため、川底から突出した岩盤を一部爆破したと伝えられている^{注22}。しかし、1878年（明治11）に磐根新道が開通して後は、車馬で行き来できるようになり、さらに1913年から翌年にかけて酒田線（現陸羽西線）が開通したことで、舟運は徐々に廃れていった。

右手に描かれた腹巻き岩は『山形名勝記』（菊地清著、清水清吉発行、1901年）の掲載写真「八白山ヲ望ム」（図35）が参照されていると考えられる^{注23}。筆触は1902年（明治35）の年記のある山形銀行蔵の《臥龍橋》の筆触と共通性があると指摘されている^{注24}、また制作年は『山形名勝記』が1901年（明治34）の刊行であることから、1902年前後と考えることも可能であるが、1911年（明治44）の来形時の制作である可能性もあり、検討の余地がある。

由一の三島県令道路改修記念画帖では、本作品の地点とは逆方向の戸沢村揚巻地内から見た腹巻岩が描かれており（図34）、同画帖で由一の下絵から版画を制作した源吉は、由一と同一地点からの写生を避けたと考えられる。図36に源吉の写生地点を示す。

来歴：「丸山」長谷川家（山形市三日町）所蔵。二代目当主である吉三郎氏（1865－1933）が入手したと考えられているが^{注25}、同家のコレクションに洋画の趣味はなく「もらい物」であるという^{注26}。吉三郎は山形銀行の前身である両羽銀行の頭取を務め、山形市立商業高校の創立者でもあった人物。山寺展出品作の可能性があると詳細は不明。

保存状態：平成25年度調査予定



図33 《腹巻岩》
朝日新聞山形版（2000年10月28日）30面より転載



図34 高橋由一作
《最上郡磐根新道ノ内草薙村
字腹巻岩ノ図》

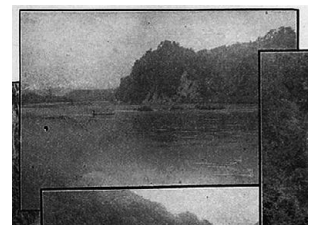


図35 八白山ヲ望ム



図36 源吉の写生地点
（2013年撮影）

3. 源吉の来形と背景

(1) 源吉の来形

源吉の来形は少なくとも2回あったと考えられる。1回は源吉作の《臥龍橋》（山形銀行蔵）と《楠正如意輪堂に和歌を題するの図》の年記がある1902年（明治35）頃、もう一回は源吉が山寺の根本中堂で展覧会を開いた1911年（明治44）である。

源吉の1902年（明治35）の来形に関しては不明な点が多い。来形の契機としては、1901年（明治34）の明治美術会の改組で源吉が東京での発表の足場を失ったことや、同年の奥羽線開通、および山形での奥羽六県北海道連合物産共進会の開催などによる地域の活性化などが推定されるが、なお調査が必要である^{注27}。

1901年（明治34）に山形市内に「西洋美術館」なる催しがあったというが、源吉との関連についても調査する必要がある^{注28}。

（2）山寺展概要

新聞報道によれば、源吉は1911年（明治44）春には来形し、5月の山形大火を契機に山寺へ移住した^{注29}。また、源吉は同年五月の山形市の大火に遭遇し、仙台へ出るための資金を調達するために立石寺で個展を開いたと伝えられている^{注30}。実際、源吉は展覧会の「閉会後は同地を辞し出羽の富士たる鳥海山の風光に接し親しく実景を写し、更に松島方面へ転ぜらるゝ予定なり」と報じられていることから^{注31}、この後石巻で1903年（明治36）に没するまで予定の行程をたどった可能性は高い^{注32}。

山寺展は1911年（明治44）10月20日から11月5日まで山寺根本中堂を会場に開催された^{注33}。根本中堂の前には「特別保護建築」及び「油絵展覧会」と「筆太に書いた」看板が掲げられていた^{注34}。「会場は根本中堂の左右れう郭〔ママ〕にして出陳点数約五十点余」^{注35}と報道されていることから、根本中堂の外陣に作品が展示されたとみてよい。

山寺展の世話は当時の山寺村長伊澤栄次によって行われていた。新聞報道によれば同月16日には「山形市の日刊四新聞社より記者一名づゝ来遊し明二十日より開催すべき展覧会の下見をなしたる後山寺館〔山寺ホテル〕に於て伊澤村長より午餐の饗を享けて帰形せり」^{注36}とあり、実際10月18日以降山形日々新聞、山形新報、山形新聞にそれぞれ同展の紹介記事が出ている。同月19日の『山形新報』には「会場には画伯夫妻の外壬生法田〔芳田、立石寺第六七世貫主、筆者註〕師及伊澤山寺村長諸氏縦覧者を歓待しつゝありき」^{注37}と報じている。

出品作は新聞報道によれば、源吉が新たに描いた山寺関連の風景画と「動物の大幅」^{注38}に加え、高橋由一の作品や書類、画本など参考品を加えたものであった。山寺関連の風景画について『山形日々新聞』は「山寺油絵展覧会▲参考品頗る多し」^{注39}と伝え、「高橋源吉氏が入神の作になる宝珠山の勝景数面〔中略〕高橋氏が作品たる天狗岩、山寺風景、面白山瀑布、最上川等は何れも運筆の自由と配色、光線の宜しきを得真に迫りたる佳作なり」^{注40}と具体的に報じている。「天狗岩」は伊澤家に伝えられ現在山寺芭蕉記念館に寄託中の《天華岩》に、「山寺風景」は現在将棋むら天童タワー所蔵の《立谷川 対面石》もしくは《山寺全景》に、「面白山瀑布」は《藤花滝》に、「最上川風景」は丸山長谷川家所蔵の風景画、もしくはこのたび新たに発見された本合海を描いた風景画に相当すると考えられるが、出品作の同定は新発見の作品を含めなお詳細に検討する必要がある。

なお、源吉は上記のほかにも山寺周辺の風景を題材にした作品を出品する予定だったようである。同じ『山形日々新聞』は「氏〔源吉〕は尚石橋その他佳品を出品さるゝはずなりしも開会期日の切迫したるを以て出品し得ざるは遺憾なりしと語られたり」^{注41}と報じているが、これに相当する作品は現在見つかっていない。「石橋」（しゃつきょう）は立石寺東方、奥山寺にある巨大な天然石橋であり、『山寺名勝案内』では「夫婦瀑布」の上に「天然石橋」として写真が掲載されている（図37）。現在は「夫婦瀑布」（姉滝・妹滝）共々宮城県に属しているが、かつての山寺の寺領であり、当時は「奥山寺」として認識され、『山寺名勝志』や『山寺名勝案内』にも山寺の三大奇景としての記述がある。石橋にたどり着くには難所を越えねばならず、源吉は現地には行かず写真のみを見て制作していたかもしれない。姉滝・妹滝は二口溪谷の奥にあり、これも写真のみに頼った制作だった可能性がある。

源吉以外の作品については高橋由一の「織田信長の密勅拝読」および「如意輪堂の楠正行（小楠公）」を主題とした作品や、またワーグマンの東禅寺における浪士討ち入りの作品を模写した作品、さらに由一の「門下生某の筆に成れる由一氏の肖像」^{注42}、及び三島通庸委嘱になる新道関連の作品、「欧州有名の画家の遺品」^{注43}や「参考とすべき書類、画本等も少なからず」^{注44}展示されたことがわかる。同展の出品作は源吉の山

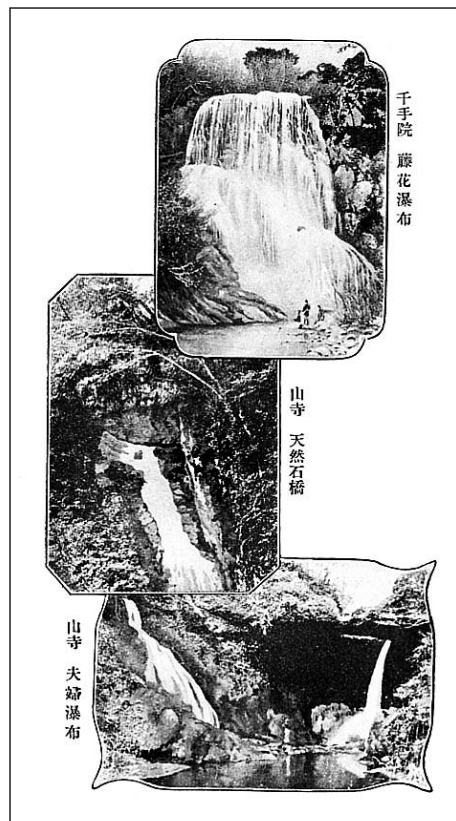


図37 山寺名勝案内（1910年）掲載写真

寺関連作品を除くと、由一生前の1893年（明治26年）前に開かれた「洋画沿革展覧会」（以下「沿革展」という）と共通性が見られる。

「織田信長」および「小楠公」作品に関する報道では、由一が両作品を「病軀を押して揮毫したる」^{注45}ことが強調されており、各紙に対して源吉本人もしくは伊澤村長から同様の広報がなされたことがわかる。同時に、「油絵大家の絶筆」^{注46}という見出しからも、「沿革展」の趣旨や報道との共通性が看取できる。ただしこれらの作品が油彩であったのか、或いは「沿革展」に出品されたような水彩の下絵・画稿的なものであったのかは記事からは判然としない。この両作品は「東禅寺」関連の作品と同様に、異本の存在が考えられ、現在松原家所蔵の源吉の油彩《楠正行如意輪堂に和歌を題するの図》（1902年）が由一作として出品された可能性もある。

山寺展における由一の「門下生某の筆になれる由一氏の肖像」が「沿革展」出品の原田直次郎の油彩画、現在東京藝術大学所蔵の《高橋由一像》（1893年）と同一作品かどうかは判然としないが可能性はある。

東禅寺関連の作品に関しては最初1911年（明治44）10月19日『山形日々新聞』および『山形新報』紙上でどういうわけか「由一の師（伊太利人）なる人親しく実境を目撃して写されたりと云ふ上野彰技隊奮戦の光景」^{注47}と同じ間違いが報じられ、同年10月20日の『山形新聞』に「アレは高輪東禅寺焼き討ちの光景で、当時日本に來た油絵氏某〔ワグマンであろう〕が東禅寺の床下に隠れて居て、その実景を模写したものを更に故高橋由一氏が模写したもの」^{注48}という訂正がみられる。「伊太利人」とはフォンタネージを指すのであろうが、おそらくワグマンと混同されたのであろう。源吉自身が間違うとは考えられないので、これらの報道は新聞記者に対する広報に源吉以外、おそらく伊澤栄次村長が関わっていたことを示唆するものである。由一の模写本は現在所在不明であり、山寺展にそれが出品されたかは不明である。源吉には同構図の油彩《高輪東禅寺英国公使館へ浪士乱入之図》（1901年頃、東京国立博物館蔵）と『風俗画報』22号（1890年）に掲載の同題名の石版画がある。「東禅寺」作品には由一や源吉による同構図の様々な異本がある可能性があり^{注49}、山寺展出品作は源吉の作品だったとも考えられる。

三島通庸唐喙の新道関連の作品に関しては『山形新聞』が「故三島通庸氏が本県令たりし時代に各地に大土木を起したる実境を模写せしめたるものも数十幅」^{注50}と報道しており、また「当時の常盤橋そのまゝを模写したものが現れた、ソレは油絵を以て有名な故高橋由一翁が三島県令の依嘱で自ら模写したもので、略図ながらも当時の面影を偲ぶべきものだ」^{注51}とも伝えている。仮にこれが「三島県令道路改修記念画帖」の一部もしくは異本であったとすると、作品数の数え方にもよるが、「三島県令道路改修記念画帖」（山形大学附属博物館蔵）のうち山形県分55図の石版画を中心とした展示ではなかったかと推察される。根本中堂にこれらがどのように展示されたのか不明だが、会場の特性を考えると、画帖そのものが置かれた可能性や、現在個人蔵の《東北新道石版画屏風》（1885年）のような屏風仕立ての展観であった可能性も考えられる^{注52}。

ほかに「某欧州有名画家の遺品」や「参考とすべき書類、画本等も少なからず」展示されたことから、同展の出品作は源吉の山寺関連作品を除くと「沿革展」と少なからぬ共通性が見られる。

（3）山寺展の背景—山寺振興策の一環として

山寺展の背景には、1908年（明治41）の東宮行啓後、近世までにおける宗教的な霊場や二口街道の交通上の要衝から、近代的な観光地に変化しつつあった山寺地域の状況があった。山寺展は山寺地域にとっては地域振興の一環であり、源吉が「今回東村山郡山寺村有志の希望に因り同地の寄勝を揮毫した」^{注53}という当時の新聞報道は同展の地域振興としての性格を物語るものである。

明治初期までの山寺の諸部落は二口街道の物流が経済的な拠り所であったが、1976年（昭和51）に山形県令に三島通庸が着任、三島が開削した関山新道、栗子トンネルが開通すると、それまで山形から仙台、太平洋岸への主要な道路であった山寺から二口峠を通過する物流は激減し、経済的な苦境に陥っている。しかしながら、山寺村、東村山郡、山形県をあげての誓願が容れられ、1908年（明治41）の東宮東北巡啓に際しての山寺行啓が実現すると、各地の新聞は山寺を「耶馬溪以上の絶景」と報道し、その名は全国に知れ渡る。行啓招聘の中心人物であった伊澤栄次の言葉を借りれば、行啓後には「火が消えたような山寺が復活し」^{注54}、観光地として全国に知れ渡った。行啓後、東村山郡では毎年行啓記念会を開き、またこれを機に1914年（大正3）から毎年「自治展覧会」が郡制終了の1922年（大正11）まで14回開催されている。この自治展覧会の詳しい内容は明らかでないが、会場は源吉の山寺展と同じ山寺根本中堂であることから、1911年（明治44）の山寺展の影響も示唆される。

山寺展の世話人であり、また行啓招聘に尽力した伊澤栄次（1872—1965年）は慈覚大師の研究家として知

られ、号は不忍、当時立石寺貫主であった壬生芳田とは兄弟であり、東宮行啓当時は山寺尋常小学校校長、山寺展開催時は山寺村長であった。1908年(明治41)12月には保硯会の会長を馬淵県知事より委嘱されている。

山寺展は以上のような、行啓後活況を呈した山寺の状況と、1911年(明治44)の山形の大火後に困窮した源吉の事情があいまって開催されたものと考えられる。先述のように源吉は1911年(明治44)春から山形に居住していたが、同年5月の山形大火に遭遇して困窮し、仙台へ行くための資金を得るために展覧会を開催したと伊澤家には伝えられている^{註55}。一方で行啓後賑わいを取り戻した山寺も大火によって参拝客が一時的に減少したと新聞は伝えており^{註56}、伊澤を中心とした山寺側としても、何らかの追加的な振興策を打つ必要性に迫られていたと考えられる。

伊澤が展覧会の主催者であったことは、《とら》の所蔵先が元は山寺小学校の分校であった荒谷小学校であることから推定される^{註57}。《とら》が荒谷小学校に収蔵されるにあたっては同校と関係の深い伊澤の関与があったに違いない。

ちなみに伊澤は山寺振興のため源吉以外にも画家を世話したようで、1905年(明治38)には鳥瞰図画家の松井天山(1869～1947)が山寺に滞在したことが伊澤の日記に見て取れる。松井天山は1906年(明治39)頃から大正期まで仙台に居住し、1915年(大正4)には《新庄線瀬見温泉鳥瞰図》を制作しているが、松井による山寺の鳥瞰図は現在確認されていない^{註58}。

(4) 山寺の風景写真と源吉の山寺風景画―「保硯会」制作の写真との関係

山寺展開催にあたって伊澤栄次の強い影響力があったことは、源吉の作品自体からも読み取れる。各作品の概要で述べたように、源吉の描いた山寺関連の風景画はほぼすべて写真を参照して制作したと考えられる。その写真の多くは山寺振興を目的とした保硯会が発行した書籍の挿図や絵葉書にあるものであり、伊澤栄次の指示のもと、山形市の照井写真館の当時の当主、照井正太郎によって撮影されたものである^{註59}。照井写真館は山寺と関係が深く、高橋由一を世話した照井泰四郎(1855～1900)は立石寺六十六世貫主、壬生優田の甥であり、ちなみに由一は優田の肖像を照井泰四郎撮影の写真をもとに制作している。また伊澤は山形師範学校在学時には照井家に下宿していた。正太郎は泰四郎の長男である。

伊澤栄次は保硯会から山寺紹介の書として1908年(明治41)に『山寺名勝志』を、1910年(明治43)に『山寺名勝案内』を刊行している。『山寺名勝志』の初版には31点の、『山寺名勝案内』には15点の山寺の風景や文化遺産の写真が掲載されている。

『山寺名勝志』は行啓に併せて東宮に献上することを目的としたものである。『山寺名勝案内』はその普及版として、より簡易な観光案内として発行されており、173×84ミリという携帯に便利なお小冊子で、漢字にはルビもふられ、依然として漢文読み下し調ではあるが『山寺名勝志』より格段に読みやすくなっている。写真7頁、本文74頁である。緒言で伊澤栄次は「東宮殿下 東北御巡啓の御途次山寺に行啓遊ばされる時献上の目的と奉迎記念のため山寺名勝志を公にしたことありしが今回本書に抛り更に通俗的に其要点のみを摘記せるもの即ちこの書なり」と刊行目的を述べている。同書の刊行には行啓後の1909年(明治42)に山寺を訪れた文学者大町桂月の進言があったようだ^{註60}。

先述のように『山寺名勝案内』には立石寺周辺の名勝に加え石橋(しゃつきょう)や夫婦瀑布(姉滝)など奥山寺の名勝写真が掲載されているが、この背景には立石寺周辺だけでは不十分で、旧寺領の奥山寺(現宮城県)までもを含めた山寺の観光資源化を進めたいという伊澤ほか山寺関係者の意向があったようである。行啓後には郡参事・千布村村長の今野有石を中心に奥山寺の瀑道整備が進められている^{註61}。大町桂月は伊澤の案内で面白山瀑布や七滝、石橋など奥山寺の名勝を訪れており、また『山寺名勝志』に序を寄せている中田豪晴は明治期に新聞論説で活躍した人物であったが、この時期は東北にあって、仙山鉄道や観瀑道路(観光トレッキング道路)について意見を述べていた^{註62}。

『山寺名勝案内』の掲載写真と源吉の山寺風景との親近性が高いのは、同書の刊行と源吉の来形の時期が近く、原版による同構図のより大きな写真や絵葉書を入手・参照しやすかったことが直接の原因であろう。しかしながら、より根本的には、伊澤ほか関係者の想定する、奥山寺を含めた山寺の代表的名勝を絵画化することが源吉に課せられた要求だったからであろう。源吉が天華岩や対面石、山寺全景に加え、「夫婦瀑布」や「石橋」(現在行方不明)など奥山寺風景を描いているのはこのためであると考えられる。

源吉は制作にあたって『山寺名勝案内』など保硯会関連の刊行物の写真か、その原板から制作された写真を参考にしたと考えられる。このことは、源吉の山寺移住が1911年(明治44)9月初頭で^{註63}山寺展まで1ヶ月半と短期間であること、1911年の来形時に源吉は53歳で、難路をたどって《天華岩》などの写景点に至

るのは困難と考えられること、また来形以前から源吉がしばしば写真を参考に制作していたことから推定できる。ただし山寺関連の風景画には現地取材がなければ描けないと考えられる点もあり、源吉自身による現地取材や伊澤を中心とした地域の人々の教導によって風景画が制作されたと考えられる。

例えば《立谷川 対面石》は同構図の写真がなく、対面石や、遠景の「たて山」と呼ばれる一本の木のシルエットのみえる山(図38)は『山寺名勝案内』掲載写真の「宝珠山 対面石」(図22)が比較的近いものの、対面石と遠景の風景はそれぞれ異なる視点によるものが合成されている。

《山寺全景》は立谷川河畔から根本中堂方面を眺めた景色であるが、画面下方の近景に立谷川が楓川と立石川に分かれる田楽淵の河原の様子が描かれており、それは写真からだけでは判然としない。橋脚や川原の形体からやはり『山寺名勝案内』掲載写真の「宝珠山 立石寺及高橋」(図20)が参照されていると思われるが、近景の川が二手に分かれる田楽淵の臨場感は現地取材によるものであろう。また画面左手遠景には「滝不動」の神木と大森山の端も描かれており(図39)、描くべき要点の教示があったことが推察される。

《天華岩》と完全に一致する構図の写真は1911年(明治44)以前の写真には見つかっていない。《天華岩》の画面左側の岩の描写は、大小の松や岩穴、きれつの描写から菊地清著『山形名所案内』(菊地写真館、1898年)や『山形名勝記』(菊地清著、清水清吉発行、1901年)掲載の「天狗岩」の写真に非常に近い(図40)。菊地清は菊地新学の孫、菊地東陽の兄で風景写真をよくしたと伝えられている^{註64}。『山寺名勝志』初版掲載の写真「(第八) 宝珠山天華岩」(図41)も比較的近いが、天華岩のより上部にトリミングされている。いずれの写真も水平もしくはやや見下ろす角度で天華岩を撮影しており、天華岩脇の岩から撮影されたものであろう。

《天華岩》に見られる、天華岩と馬形・二口街道方面の眺望の組み合わせは、鑑賞者を登頂による眺望へと誘うねらいがあると考えられる。現在は立ち入り禁止となっているが、昭和期まで天華岩は登頂可能であり、開山堂付近からの登山瀑道も存在していた。実際、天華岩とほぼ同構図の昭和戦前期と思われる観光写真が存在する(図42)^{註65}。ロープを伝って登山する和服の女性、紀行文でも有名な文学者吉田絃二郎の解説が付随し、観光客を登山へ誘う構成となっている。源吉の作品は明治期の写真の視覚・技術では困難であった天華岩登山への誘いを視覚化しているのであろう。伊澤は天華岩(天花岩)への新道(登山瀑道)開鑿を構想していたようであり^{註66}、伊澤にとって天華岩登山は瀑道整備による奥山寺名勝散策と共に山寺の観光資源化の要点だった。志賀重昂『日本風景論』(1894年)が登山奨励の書でもあったように、源吉の作画の背景となった保硯会の『山寺名勝志』や『山寺名勝案内』もまた観光登山奨励の書として読むことができよう。

先述のように、源吉が参照したと思われる天華岩の写真の構図は伊澤栄次の意向を強く反映していると考えられる。『山形名所案内』や『山形名勝記』における、また保硯会関連の「天華岩」の写真は、先述のように天華岩の脇の岩から撮影しているが、この角度からの天華岩の姿は、伊澤栄次の住居のあった下山寺の



図38 立谷川 対面石
たて山と芦沢峠の位置を矢印で示した。



図39 山寺全景
大森山および滝不動御神木を矢印で示した。



図40 山形名勝記に
載された天華岩の写真

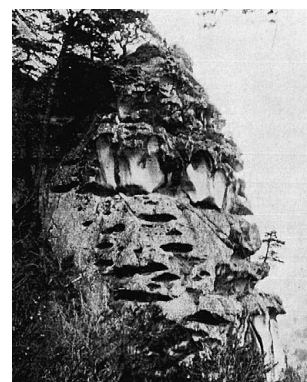


図41 山寺名勝志に掲載
された天華岩の写真

芦沢地区から眺めた天華岩の姿に近い（図43）。それは今日の観光写真の撮影方向として一般的な、山寺駅や宝珠橋（高橋）方向からみた垂直性の強い天華岩の姿とは大きく異なっている（図44）^{注67}。保硯会関連の天華岩の写真は伊澤邸からみた天華岩の姿に近く、伊澤栄次にとってはそれが天華岩の自然な姿だったのであろう。

芦沢方面からみた天華岩の写真は円仁が芦沢峠を越えてからみた天華岩の光景が意識されたアングルであった可能性もある。立石寺を開山した慈覚大師円仁は秋保から清水峠を経て山形市高瀬地区の風立寺に至り、そこから芦沢峠を越え芦沢川（旧芦沢村）に至り、地藏畑といわれる地区から天華岩を眺望したとされている^{注68}。伊澤栄次は慈覚大師円仁の研究家であり、天華岩の写真撮影の視点を照井正太郎に指示するにあたって円仁の山寺入場を意識したことは充分考えられる。

芦沢方向からの天華岩を画面左に、二口峠方向の眺望を画面右に配した源吉の《天華岩》の構成は伊澤栄次の意向を反映していると考えられる。実際には天華岩と二口峠方向の眺望は画面に描かれたような姿では同時には視野に入らないからである。芦沢方向からの天華岩と、山寺地域との歴史的・経済的関わりの深い二口峠を同時に収めた《天華岩》の構成は、伊澤栄次の教導による山寺地域のアイデンティティの表現であったといえる。

同じことは《立谷川 対面石》や《山寺全景》にもいえることができる。《立谷川 対面石》の画面右に描かれた対面石の左手、遠景には芦沢峠方面の光景が描かれており、「たて山」の右手が芦沢峠の方角にあたる（図38）。これは円仁が芦沢峠を越えて山寺に入り、対面石で磐司磐三郎と対面したという伝承を想起させる。同作品の複数の視点も伊澤の教導を示唆するものである。田楽淵付近からの眺望である《山寺全景》も、芦沢、南院から中島を経て、すなわち立石川と紅葉川を越えて千住院に至ったという円仁の山寺入場の行程を想起させる^{注69}。勿論、遠近感を強調した構図が洋画の構図に適したということはいまでもない。

（5）まとめにかえて一由一の業績との共通性と差異

源吉の来形前後の行動をみると、由一の来形前後の行動との共通性が感じられる。両者の来形前後の業績を比較すると、画塾（団体）の解散、行幸・行啓との関わり、来形と風景画の制作という点で両者には明らかに平行性がある。簡単にいえば、源吉は東北における由一の経験を反復しているようにみえる。先述のように、山寺展自体が啓蒙的な「洋画沿革展覧会」の反復という側面がある。

源吉は由一の壮年期から晩年期にかけて助手として、また明治10年代後半からは《三島県令道路改修記念画帖》や《西周像》などにみるように共同制作者として画業を共にしており、由一没後は『高橋由一履歴』を編集出版するなどして由一の業績を世に問うている。また源吉は石巻で没するまで由一の資料を携行しており、由一の業績は由一没後の源吉の画業における拠り所、参照すべき手本であった。東京での足場を失った源吉が、しばしば東北に出張し業績を残した由一の行動を参考にしたことは充分考えられる。

由一の新道画が行幸を契機に見出された近代山形における新名所の記録画であり、近代の歴史画であったとすれば、源吉の風景画もまた行啓を契機に再発見された近代山寺の記録画であり、歴史画であったといえるであろう。近代における行幸・行啓が地域の人々に「風景」を視覚の対象にするとともに、明治以前の地域の伝統を再発見させたことが指摘されている^{注70}。由一の新道風景画と源吉の山寺関連の風景画は地域の風



図42 天華岩の観光写真（絵葉書）



図43 芦沢地区から眺めた天華岩
（2013年撮影）



図44 宝珠橋から見た天華岩
（2013年撮影）

景の視覚化という点で共通するが、地域における伝統の再生という点で源吉の風景画はより地域のアイデンティティ形成に即したものである。由一の新道風景画は由一の進言によるものとはいえ、三島通庸の委嘱による、三島の開発した新道の記録、換言すれば「上からの」要請による記録画であった。これに対して源吉の山寺関連の風景画は東宮巡啓によって再発見された地域の名勝を伊澤栄次を中心とした山寺地域の人々からの、いうならば「下からの」要請によって写景したものであった。由一と源吉の表現の相違は、明治初期の国家や行政による上からのナショナリズムと、明治中期以降における国民側からの、郷土意識を孕んだナショナリズムとの相違であろう。源吉の山寺関連の風景画は山寺地域の人々、就中伊澤栄次の「烈々たる郷土愛」^{注71}を孕んだ眼差しに即したものであった。それは加藤典洋の区分に従うならば、「旅行者的審美の態度による探勝の風景」と「定住者の審美の態度による生活的風景」の狭間に位置するものといえよう^{注72}。源吉の風景画は近代以前の名所絵図ではなく、写実的な近代的視覚に基づいている。とはいえそれは印象派的な匿名的かつ純粹視覚的な風景ではなく、対面石や天華岩、二口峠など山寺の歴史を物語る題材をモチーフとしたナラティブな表現であった。

しかし、油絵という媒体の見慣れなさとも相まって、当時において源吉の作品が有した意味を理解できた者はそれほど多くなかったのかもしれない。源吉の山寺関連の作品が伊澤家をはじめ山寺や天童地域に留まっていたのは、山寺展でさほど作品が売れなかったことを暗に示しているように思われる。

4. 今後の展望

今後の課題としては、制作経緯の不明な作品について明らかにしていくことはもとより、1902年(明治35)の源吉の来形および1911年(明治44)までの、また山寺展以後石巻で没するまでの行動について明らかにすることがあげられる。また源吉の作画技法・材料と技法書や同時代の他の作家による表現を比較考察し、源吉の洋画技法の特色についてより詳細な分析を行うことも必要である。これらの調査研究を通じて、山形における源吉の業績について明らかにするとともに、明治期における洋画表現の一端と地域におけるその受容の実態について明らかにしていきたい。

注

注1) 歌田眞介編『高橋由一油画の研究—明治前期油画基礎資料集成』中央公論美術出版、1994年。

注2) 彰技堂での本多錦吉郎の訳述講義を、1883年(明治16)に坂広が筆記したものの一冊。原本は“The Art of Landscape Painting in Oil Colours” in “Winsor and Newton's series of HAND-BOOKS ON ART.” Vol.III (1856) で、国沢新九郎の将来本であるといわれている。

注3) 油絵具の透明性を生かして、不透明な下塗りの上に透明な上塗りを施すことで、明暗や質感、空間を表現する方法。高橋由一の作品では、1877年(明治10)以降の作品にグレージング技法が見られる。

注4) 『寒河江市史編纂委員会寒河江市史編纂叢書第32集』、寒河江市教育委員会、1985年、p.35。

注5) 「絵画は眠る 高橋源吉と山形④銀行」『朝日新聞』山形版、2000年10月28日、30面。

注6) 「絵画は眠る 高橋源吉と山形①記憶」『朝日新聞』山形版、2000年10月25日、26面。

注7) 1892年(明治25)作、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵。1892年の春、病床の由一は献上画である《楠正行如意輪堂に歌を題するの図》と《織田信長ひそかに密勅を五老臣に示すの図》を制作している。

注8) 1892年(明治25)頃作、東京国立博物館所蔵。

注9) 注6文献。奥平家は幕末の山形城代であった水野家の家臣の家系で、山形地域でいう「御徒衆(おかちしゅう)」であり、その多くは幕末後には教員や銀行員などになっている。

注10) 伊澤友明氏談。

注11) 面白山から流れる楓(もみじ)川と、二口峠から流れる立石川が立谷川へ合流する地点。田楽法師が禊をおこなったところと言われ、この地域は中島地区といわれている。

注12) 高橋は現在の宝珠橋。立谷川洪水のため落橋し、1910年(明治43)に新しく架橋された際に技師の意見を取り入れ、欄干を白く塗られた。『山寺名勝案内』は、その4ヵ月後脱稿されている。

注13) 伊澤不忍原著『続山寺百話』伊澤貞一、1997年、p.92。

注14) 注13に同じ。

注15) 伊澤不忍『山寺百話』伊澤貞一、1991年、p.160。

注16) 伊澤栄次『山寺名勝志完』保硯会、1908年、pp.78—79。

注17) 「山寺油絵展覧会 参考品頗る多し」『山形日々新聞』1911年10月19日、3面。

注18) 「絵画は眠る 高橋源吉と山形③山寺」『朝日新聞』山形版、2000年10月27日、31面。

- 注19) 戸田家での聞き取りによる。
- 注20) 1899年（明治32）創業の大石田銀行は、昭和2年に尾花沢商業銀行と合併し、村山銀行になった。その後、両羽銀行（現山形銀行）に吸収合併された。
- 注21) 注5文献。
- 注22) 安倍季雄『偉人のあしあと』以文會、1951、pp.49－63。
- 注23) 『山形名勝記』は山形県内の名勝を写真と文章で紹介したもので、著者の菊地清は菊地新学の孫で菊地東陽の兄である。同書の写真は序文によれば「清水」と「阿部」の手になるものであるようだが、おそらく風景写真をよくした菊地清の写真も含まれているとみられる。清水は同書の発行者で巻末広告にある山形市勸工場内「福島屋清吉」の清水清吉、阿部は巻末広告にある山形市勸工場内「岩松屋」であろう。同書は1901年（明治34）の山形市における奥羽六県北海道連合物産共進会開催にあわせて出版されたとみられる。ちなみに菊地清は1897（明治30）年に菊地写真館から同様な写真入りの名所案内誌『山形県名所案内』を発行している。
- 注24) 注5文献。
- 注25) 同上。
- 注26) 同上。
- 注27) ちなみに（臥龍橋）との関連でいえば、同橋のある白岩に水力発電所が建設され、山形電気が開業したのは1900年（明治33）6月1日であり、これに先立つ5月の試験点灯で山形、長崎（現中山町）、寒河江、白岩地区はお祭り騒ぎであったという。以下を参照。近藤侃一『六十里越』山形文学会、1969年、p.95。
- 注28) 吉田吉助著、後藤嘉一編『山形桐紙と吉田家』吉田桐紙工業所、1968年、p.219。
- 注29) 「久しく同市に居住して彩豪を揮（ふる）っていた油絵専門の高橋源吉翁は兩三日前に奥羽の耶馬溪たる山寺に居を移し〔後略〕」（「見聞雑記」『山形新聞』1911年9月5日、2面）。「故高橋由一氏の令息高橋源吉は春來当市に來遊し〔後略〕」（「山寺油絵展覧會」『山形日々新聞』同年10月12日、2面）。
- 注30) 『宝珠のしずく』第8号、山寺公民館、2004年2月29日、p.84。記事中明治42年とあるのは44年の誤り。
- 注31) 注17文献。
- 注32) 今回の調査で発見された《本合海》新庄市の本合海付近から最上川と日山を描いたもので、源吉が新聞記者に語った通りの行程をたどった可能性が示唆される。ただし、この作品が山寺展出品作であることを考慮し、なお検討せねばなるまい。《大石田風景（仮題）》もこの旅程の途中で描かれた可能性がある。
- 注33) 当初10日間の予定（「油絵大家の絶筆」『山形新聞』1911年10月18日）が5日間延長された。伊澤栄次の日記である『不忍日記抄 天1911年』11月5日の項に「油絵展覧會本日終了。高橋由（長男）高橋源吉の山寺風景画も」とある。
- 注34) 喜多六「山寺に遊ぶの記（一）」『山形新聞』1911年10月20日、3面。
- 注35) 「山寺の油絵展覧會▲根本中堂の盛観」『山形新報』、1911年10月19日、2面。
- 注36) 「山寺だより」『山形新聞』1911年10月19日、3面。
- 注37) 注35文献。
- 注38) 「油絵大家の絶筆」『山形新聞』1911年10月18日、2面。
- 注39) 注17文献。
- 注40) 同上。
- 注41) 同上。
- 注42) 同上および注35文献。
- 注43) 注34文献。
- 注44) 注38文献。
- 注45) 「山寺油絵展覧會」『山形日々新聞』1911年10月12日2面、および注38文献。
- 注46) 注38文献。
- 注47) 注17文献、および注35文献。
- 注48) 「見聞雑記」『山形新聞』1911年10月20日、2面。
- 注49) 以下を参照。古田亮「ワグマン、由一、源吉の描いた東禅寺事件図について」「没後100年 高橋由一展 近代洋画の黎明」展図録、神奈川県立近代美術館、香川県文化会館、三重県立美術館、福島県立美術館、朝日新聞社、1994年。
- 注50) 注38文献。
- 注51) 「見聞雑記」『山形新聞』1911年10月18日、2面。
- 注52) 《東北新道石版画屏風》（1885年）に関しては「近代洋画の開拓者 高橋由一」展図録（読売新聞社、NHK、NHKプロモーション、2012年）pp.206－207に図版と岡部信幸の解説がある。
- 注53) 「山寺油絵展覧會」『山形日々新聞』1911年10月12日、2面。
- 注54) 伊澤栄次『山寺行啓記』1966年、p.14。
- 注55) 注30文献。
- 注56) 注36文献「山寺は東村山郡の山寺にあらずして山形市の山寺なることが適切に照明せられたりそは山形市の大火後は一向に参詣者なく故老も何十年來曾て見ざる所なると言ひ居りたれるが山形市の復旧と共に近頃は追々と遊覽者を増加したり」。
- 注57) 現在荒谷小学校は天童市に所属しているが、同校は山寺学校荒谷分教場として1880年（明治13）に創立し、1889年（明治22）に荒谷村と山寺村が1892年（明治25）に合併後、同校は山寺小学校荒谷分校となり、1913年（大正2）4月に山寺小学

校荒谷分敷場となる。伊澤栄次は1898年（明治31）10月より1911年（明治44）1月まで山寺小学校（山寺尋常高等小学校）校長の職にあり、その後山寺村長、東村山郡書記を歴任後、1922年（大正11）に山寺小学校校長に復している。

注58) 松井天山については下記を参照。中西遼太郎「昭和初期の千葉市街を描いた鳥瞰図」『近代日本の視覚的経験 絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版、2008年、p.105。

注59) 『山寺名勝案内』の出版元である保硯会（ほりゆうかい）は、山寺石の採掘から山寺の景観を保護し、また山寺を振興するために伊澤栄次、今野有石らによって創設されたものである。県をまじえた正式な発会は行啓後の1908年（明治41）11月だが、行啓時に東宮に献上するため、『山寺名勝志』など山寺紹介のための書籍や観光絵葉書を先行して発行している。さらに保硯会からは『山寺名勝志』や『山寺名勝案内』に先行する山寺紹介の書として、仙台の漢学者岡千仞による『山寺攬勝志』（明治34年）が同会から発行されている。岡は三島県令道路改修記念画帖の跋文を書いた人物である。保硯会関係の出版物の印刷元は東京市神田区新石町三番地の東陽堂であり、同社の創業者は米沢出身の吾妻健三郎（安政3年—明治11年）、同社は我が国銅版印刷業の草分けである。同社は1888年（明治21）に美術専門誌『絵画叢誌』を、1889年（明治22）には本邦グラフ雑誌の先駆けともいうべき『風俗画報』を創刊しており、奇しくも同誌には源吉も作品を掲載している。『山寺名勝志』には『風俗画報』編集長であった山下重民も序を寄せている。伊澤栄次の日記には、『山寺名勝志』編纂にあたって照井正（正太郎）に写真を撮らせたこと、また、神田駿河台の吾妻健三郎方で校正に従事したことが記されている。

注60) 伊澤栄次『不忍日記抄』 1909年7月21日。大町桂月は7月19日二口峠を経て山寺に入り、伊澤は20日には中田豪晴と共に小宴を開いている。

注61) 注13文献、p.80。

注62) 注60文献、1908年10月17日。

注63) 「見聞雑記」『山形新聞』1911年9月5日、2面

注64) 『菊地東陽伝』菊地東陽先生傳記編集会、1941年、pp.155-160。

注65) 小林和彦氏（山形歴史たてもの研究会）よりご提供いただいた。

注66) 伊澤栄次「不忍自序」注13文献、p.1。

注67) 山寺の新関孝夫氏のご教示による。

注68) 二口峠は立石寺開山後の開通である。

注69) 『山寺名勝志』（1908年）における写真31葉のうち、冒頭は「（第一）中島ヨリ宝珠山ヲ望ム」（図45）であり、次頁は田楽淵付近からの「（第二）宝珠山立石寺」（図46）である。1908年（明治41）の行啓直前において宝珠山立石寺の全景は中島、田楽淵方向から望むべきものという伊澤栄次の認識があったのかもしれない、この視点は1910年（明治43）の『山寺名勝案内』でも踏襲されている。

1879—1880年（明治12—13）頃、学校に山王橋（神橋）から立谷川を越えて通ったという伊澤の回想記が『続山寺百話』にある（前掲、p.155）。当時山寺学校（後の山寺小学校）は根本中堂隣の村社、日枝神社（山王社）拝殿内にあり、山王橋は1902年（明治35）に洪水で流されるまで田楽淵に近い日枝神社南方下に架けられていた。芦沢地区に住んだ伊澤にとって、中島・田楽淵方面からの宝珠山・立石寺の姿は馴れ親しんだものであったろう。ちなみに『山寺名勝志』（1925年再版）における写真頁の冒頭は立谷川対岸の高台正面からの眺望である「宝珠山立石寺境内全景」（図47）に変わっており、それは現在の「風雅の国」付近からの眺望に近い。1908年（明治41）の行啓でも皇太子は高橋を渡って対岸から立石寺を眺望している。今日ではおおむね対岸正面からの景色が宝珠山立石寺全景の眺望として定着しているようである。

注70) 以下を参照。原武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓』みすず書房、2001年、p.163。

注71) 山形市立山寺小学校『山寺母校の百年 創立百周年記念誌』創立百周年記念事業協賛会、1974年、p.46。

注72) 加藤典洋「武蔵野の消滅」『日本風景論』講談社文芸文庫、2000年。



図45 （第一）中島ヨリ宝珠山ヲ望ム

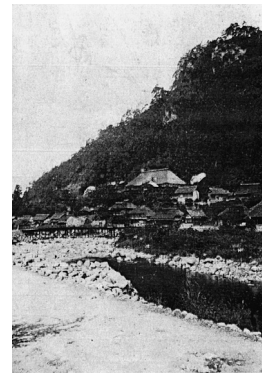


図46
（第二）宝珠山立石寺



図47 宝珠山立石寺境内全景

付記

作品調査にご協力いただきました所蔵者の方々に篤く御礼申し上げます。また、本研究に際しては、伊澤貞一様、新関孝夫様、照井與泰様はじめ、多くの方のご教示を得ました。御礼申し上げます。

2-2 新出の高橋源吉の風景画について

大場詩野子

1. はじめに

このたび新発見となる高橋源吉の風景画について報告したい。ことの経緯は、2014年12月13日から23日に本研究事業の成果展覧会として行った「ヤマノカタチノモノガタリ」展開催中、来館者より寄せられた情報による。その後、寒河江市市史編纂室の宇井啓氏を通して、所有者に連絡を取り、年明けて2015年2月4日、所有者宅において作品調査および所蔵者への聞き取り調査を行なった。

作品は横長のキャンバスに描かれた風景画である。G.TAKAHASHIのサインが画面右下にあり、色づかい、筆致など技法上の特徴と、木枠の構造や寸法などの形式上の特徴が、これまで県内において調査を行なった高橋源吉の油彩画の特徴と一致したため、源吉作と断定した。制作の動機や画題等においてはなお詳細な検討が必要であるが、まずはこのたびの調査で知り得たことを報告したい。



2. 概要

本作品は布に描かれた油彩画で、木枠に張られている。寸法は縦54.4センチ、横106.1センチで定形外の木枠サイズである。署名は前述のように、画面右下に暗色の絵具でG.TAKAHASHIとあるが、年紀や裏書はなく制作年は不明（図1）。また、比較的新しい裏蓋とグレージングのついた額が付属しており、後世に新調されたものと思われる。



図1 サイン

3. 来歴

本作品は寒河江市の藤田家が所蔵するもので、現在の当主によれば、祖父にあたる藤田博氏が昭和40年代に山形市七日町にある書店の八文字屋裏付近にて行われた蔵解体の際、天井の梁とともに購入したものであり、藤田家では高橋由一作として伝えられてきたという^{註1}。

4. 画題と構図

山間を流れる川を描いた雄大かつ清々しい印象の風景画であり、藤田家では最上川の風景と伝えられてきた。左右に差し迫る山の配置や形状、その間を蛇行する川と岸辺の様子、点景として鮎釣りと思われる釣り人が描かれていることから（図2）、最上川中流域に位置する最上峡を描いたものと思われるが、場所の特定は同地域の雪解けを待ち、現地取材を行ったのちに稿を改めて報告したい^{註2}。

構図は、画面中央に奥から手前へ流れる川を描きその両側に山を配す。源吉と同窓の小山正太郎が主宰した画塾不同舎で盛んに行われた遠近学習法である道路山水様式の、河川版ともいえるような構図である。明暗の配置も手前を暗く描き、遠景の山と空、川を明るく描いて画面中央に光を集めることで、一点透視的な構図を強調している。



図2 釣り人の描写

5. 制作材料の特徴および技法

本作品に使用されている制作材料について特記すべきことは、本作品に使用されている木枠の構造と小さな三角形の形をした楔の特徴（図3）が、図4に示す、明治44年に山寺で制作された《天華岩》（山寺芭蕉記念館所蔵）のものと一致していることである。このことは本作品が山形で制作されたことを示すものである。

技法について、描き手順はまず空から描き始め、手前に向かって描き進めるという手法が取られている。個々のモチーフに注目すると、源吉の画風を決定付ける定型化された描写が見られる。たとえば、わずかに暖色を混ぜた白色絵具で厚塗りされた雲の描写や、ゆるく溶いた白色絵具で細く描かれた川面の波形、岩の描写などである（図5、6）。これらの細部描写は近くで見るとやや粗く、稚拙にも見えなくもないが、構図と明暗の配置が巧みなため、遠くから見ると画面は全体感を失っていない。このことは源吉の油彩画の大きな特徴であり魅力であるといえよう。



図3 本作品の木枠と楔



図4 《天華岩》の木枠と楔

6. 保存状態

表面にはワニスの変色、画面下部にはキャンパスの変形による絵具の亀裂と剥離、欠損が見られる（図7）。キャンパスには緩やかな波うち状の変形、裏面には大きな水染みの跡がある。以上のような痛みが部分的に見られるものの、全体的な絵具の固着は制作から100年以上経過してなお良好であり、源吉の油彩画技術の確かさを示すものとなっている。

キャンパスの張り直し、裏面の当て布など、過去に修繕された痕跡がある（図8）。ワニスも修繕の際に塗布されたものと思われ、オリジナルのものではない。



図5 雲の描写



図7 絵具の欠損

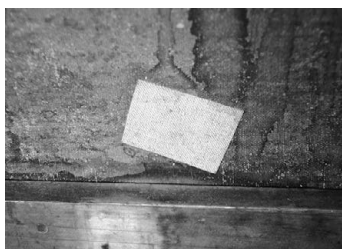


図8 裏面の当て布



図6 川面の描写

7. おわりに

高橋源吉の進出の風景画について報告した。本作品にはG.TAKAHASHIというサインがあり、作画手順やモチーフ描写の特徴がこれまで調査を行ってきた高橋源吉の画風と一致していることから、源吉の作品と断定できるものである。さらに木枠と楔の特徴が明治44年に制作された《天華岩》と一致していること、画題が最上峡付近の風景と考えられることから、源吉が、その晩年の2度にわたる山形滞在時に制作したものと推測される。ただし、制作年や画題の確定は、今後、詳細に検討する必要がある。

さて、これまでほとんど美術研究の中で言及されてこなかった高橋源吉だが、その理由としては、晩年、中央画壇から離れてしまったことや、あまりに偉大な存在として扱われてきた父、由一の陰に隠れてしまったということがある。筆者は、この歴史から抜け落ちてしまった画家とその作品に、地域（山形）という光を当てることで新たな輝きを放ち始めるのではないかと考えてきた。

調査を進めていくうちにわかってきたのは、県内に存在する作品はほとんどが、山形の人々との密な交流の結果生み出されたものであることである。各地の素封家を頼って制作をしながら流れ暮らすのは、古くよりある文人や画人のあり方だが、東京を離れ山形にきた源吉を、人々はずいぶんよく世話したのではないかなと思う。でなければ、源吉も2度も来形しないだろう。さらに、筆者にとって驚きだったのは、それら作品が生み出された場所を遠く離れることなく現在まで引き継がれていることで、それは、このたび報告した風景画にもいえることである。山形の多くの人の心には明治期より100年以上経過した今にあっても、先祖か

ら受け継いできたものに寄り添う気持ちが当たり前のようにあるように感じられる。それは、ものや情報があふれる時代にあって、また、経済効率が最優先されがちな現在にあって、私たちの多くが忘れがちなことであると思う。とはいえ、そのようなことは長くこの地に住んでいる人にとってはごく当然のことであって、あまり意識されていないかもしれない。

地域文化遺産の価値の創出と保存の実践を行う本研究事業は、筆者にとっては図らずも私たちの今のあり方をかえり見ることにつながるものであった。高橋源吉の油彩画群が今後も変わらず受け継がれていくことを願う一方で、そのために文化遺産の保存活動に携わる筆者自身にはこれから何ができるのか考え実行していきたいと思う。最後に作品所蔵者の方々をはじめ、調査に協力いただいたすべての方々に感謝の意を表して、報告を終えたい。

注

注1) 株式会社八文字屋は現在山形市七日町に本店を持つ書店で、設立は昭和25年だが、屋号は江戸時代に上方より持ち帰った浮世草子の八文字屋本で貸本業を営んだことに由来する。

注2) 最上峡は戸沢村古口地区から庄内町清川地区までの区間をさす。

附記

調査に際して御高配賜りました藤田様に厚く御礼申し上げます。また、宇井啓様（寒河江市市史編纂室）、松田孝様には大変お世話になりました。ありがとうございました。